

近代日本文学の側溝

長谷川泉 著

〈著者略歴〉

長谷川 泉 (はせがわ いずみ)

大正7 (1918) 年、千葉に生まれる。

昭和17 (1942) 年、東京帝国大学文学部卒業 (国文学専攻)。清泉女子大学教授・東大講師等をへて現在学習院大学講師・医学書院編集長。昭和34 (1959) 年、近代文学研究により久松賞受賞。

主要著書

「森鷗外論考」等鷗外研究6部作 (明治書院) 「近代名作鑑賞」 「近代日本文学思潮史」 (至文堂) 「近代文学研究法」 「川端康成論考」 (明治書院) 「近代日本文学の位相」 (桜楓社) 「文章を書く心」 (教育出版センター)

以文選書 14 近代日本文学の側溝

振替	東京〇一四六二二	電話 (03) 九二七一八九三〇 (代)	〒170 東京都豊島区北大塚三一二九一二	株式会社 教育出版センター	発行所	印刷所	著者	発行者	著者	昭和五十三年一月三十一日 発行◎
						長塚印刷株式会社	長谷川 泉	柴崎 芳夫	長谷川 泉	定価二八〇〇円 (送料二〇〇円)

乱丁・落丁本はいつでもお取替えいたします

3091-3214-1475

序文

森鷗外の故郷津和野を訪れる者は、巷の側溝のたたずまいにしばし目を奪われるであらう。

豊かな水量と、清冽な流れ、そして、ゆうゆうと鯉の遊ぶ風情は、武家屋敷の残存する山蔭のこの町の歴史と、その興亡に思いをはせさせる。

そして、この側溝は、ただにそれだけにはとどまらない。側溝の水は、道路ぞいの各家々に引かれて生簀となり、そこにも鯉はかわれる。かくして、津和野町の鯉は、町の人口一万を越えて二万匹となるのである。

*

側溝には、町づくりの経済的基盤があった。利水の一因子でもある。しかし、側溝の持つ因子は、そのことを越えて情趣的でもある。情趣的であるというこは、人間的でもある。側溝に遊ぶ鯉が、食用のものではなく、愛玩の対象であり、人間的な情感をかきたてるものであることは、津和野町に一步足を踏み入れた瞬間に誰もが共感しうるところである。

側溝に映る人影は、人間の哀歎を秘めて極めて、情趣的である。鯉をとろうとしない、鯉をいじめようとしなない。津和野町の人たちの愛憐のうちに、側溝は豊かに、清冽である。それは、人間的であり文学的である。

*

側溝は、文字通り、側溝である。津和野川のように町を貫流する大河でもなければ、巨大な汚濁をもおし流してしまふ暗渠のふてふてしさも持たない。それは、あたかも文学が、一見繊弱に見えるかのようにである。

近代文学への対決は、貫流する大河のような姿相もあれば、ふてふてしい暗渠のような姿相もあるであろう。しかし、ここではそれをとらなかつた本書に「側溝」と題したゆえんである。

*

「鐘安」「照貌」「風雲」「側溝」「年輪」「韋編」「懐執」「羞媚」「童冠」「輓歌」に分かつたことは、とくに他意はない。私の好みにすぎない。そして、時に一般には熟しない信屈聳牙な言葉を用いたことも、とくに他意はない。本書の題名に「側溝」をもって呼んだことと、同じような位相のものであるかもしれない。

*

再び言う。津和野町の側溝も、大道における側溝と、脇道における側溝とは、大きくその趣を異にする。

本書においても、そのような側溝の趣が爾漫してゐるであらう。そのことを、わたくしは最初から意に介しなかつた。側溝では、本来そんなものだらうという、これは一種の居直りの弁である。

本にも側溝のようこの本があつてよかろうという、これは自己弁護の言葉である。

それにしても、もう一度、津和野の巷のはずれの側溝に、わたくしの影を映してみたいと思う念がしきりである。

津和野を初めて訪れてから、すでに多くの歳月をけみした。

*

「輓歌」における対談、あるいは鼎談を再録することを許されたアイヴァン・モリス氏の御遺族と、武田勝彦、鶴田欣也両氏に謝意を表す。

昭和五十二年二月

長谷川 泉

近代日本文学の側溝 目次

序文

鏡 妄

現代女流文学とナルシズム 3

「源氏物語」と近代作家 16

照 貌

加藤周一の天紙風筆 29

井上靖文学の華麗なる環 46

風 雪

芥川没後五十年と芥川賞の風雪 57

三島由紀夫の作家開眼 71

文芸用語と時代背景 85

側 溝

安楽死 95

教養を高める読書法 124

小説の文章と実用の文章 154

年輪

近代文芸思想の流れ 189

近代文学論争史 223

近代文学を築いた医師たち 234

韋編

鷗外資料十四 253

三明永無氏蔵の「森林太郎」標札 309

懐執

江刺市の川端康成文学碑 319

光流れる天城路の抒情 324

川端康成氏の故郷宿久庄を訪れて 338

羞 媚

太宰治の涙の奥の人生 345

ナウマンとハーン 352

童 冠

川端康成の児童文学 361

田宮虎彦の児童文学 368

「二十四の瞳」の哀歎 379

輓 歌

久松潜一博士をしのぶ 385

成瀬正勝氏を悼む 388

一期一会―鈴木彦次郎さんを偲ぶ 391

回憶悲傷―川端康成氏の思い出 395

対談 「十六歳の日記」の観察と記録 401

アイヴァン・セリス氏
薫貴公子をいたむ 419

鼎談 世界文学の中の日本文学 427

鏡
妄

現代女流文学とナルシズム

三島由紀夫の「ナルシズム論」

性について、複雑で、卓抜な見解を持っていた三島由紀夫に「ナルシズム論」がある。ここでは、男性と女性の差違の峻烈な意見が開陳されている。この世に男性と女性の存在が、生物学的にあり、異性と呼ばれる限り、両者の間に差違があるのは当然のことであるが、三島由紀夫は、その差違を、自意識の問題、ナルシズムの焦点から論及したのである。

水鏡に映る美貌に魅せられて溺れて死んだナルシスは、女ではなく男であった。ナルシズムは、ナルシスが男であることによって意味を持つ。三島由紀夫は、女にはナルシズムは存在しえないという。ナルシスが水鏡に見つめたのは、自己の像であった。女が鏡に見つめる像は、己の像ではない。三島由紀夫の論理の展開は、そのようなメカニズムで行われている。

三島由紀夫の論理の展開は、次のように迎られる。精神と肉体の乖離を前提とする自意識なるものは全く男性的なものである。精神が肉体を離れ、肉体ばかりでなく精神自体をも客観的に眺める「離れ業」を演じようとする精神の不可思議な衝動が自意識であるとして、その自意識を男「性」と結びつけたのである。

それならば、女「性」はいったいどうなるか。三島由紀夫の論理によれば、次のようになる。

女の精神は、子宮が引きとどめる力によつて、男の精神ほど自由にふらふらと肉体を離れることができない。男には上部構造である頭脳と、下部構造である生殖器とが、全然関係のない別行動をとることもできるけれど、女にはどうも、古代の爬虫類のやうに、頭と下半身と両方に脳があるらしいのである。脳と言つてわるければ、女の精神を支配する中枢は二つあつて、一つは頭脳であり、もう一つは子宮であつて、この二つが実に密接に共同して働くから、精神はいつも、この二つに両方から引つばられてゐて、肉体から離脱できない。

両者の差違は、したがつて女の精神 \parallel 存在、男の精神 \parallel 非在という帰結の様相をとる。自意識とは、非在に関する精神のもつとも生粋な、もつとも非在的なものという図式を描くことになる。

「肉体(子宮)といふ安全弁」を持つ女「性」の自意識は、「無数の合せ鏡の生む鏡像」のような無限の増殖性を持った男「性」の自意識とは、根本的に異なる。そうなると、女「性」の鏡は、自意識

の欠如した主観の鏡であり、男「性」の鏡は自意識の勝った客観の鏡である。前者は、化粧のための、変容の鏡である。後者は化粧のない自己自身に対する鏡である。ナルシズムは、もちろん、後者に存する。

男・女一般と、女流作家、そして男「性」作家とは、そこで、いったい、どのようにかかわってくるのであろう。作家に、男流作家なるものがなく、女流作家のみ存在するのは、いったい、いかなる意味を持つのであろうか。作家に創作主体としての男・女性の特異性のいちじるしさと、存在すること自体の特異性がない限りは、とくに創作主体の「性」を問題にする必要性はないはずである。

男「性」の場合に、男性作家や男性文学の存在が強調されることなく、女「性」の場合にのみ、女流作家や女流文学の存在が意識され、強調されるのは、まさしく、上述の特性においてである。男「性」の作家は、作家であり、男「性」の作家の文学は、文学なのである。

*

文学の機能は、文学的真実を追究する虚構に求められる。虚構は非在である。文学の機能と結んだ虚構が嘘八百でないことは、それが文学的真実を追究する客観性とかかわるからである。客観性は自意識と連結される。自意識は、さきに触れたように、精神と肉体の乖離を前提とする。これは男性的なものである。ナルシスは男性である。文学の機能は、このようにして本来、男性的であり、ナルシズムに連ねられる。男性文学という言葉や、男流文学という言葉、ないしは男性作家という言葉の存在しない理由がそこにある。

虚構は存在ではない。虚構が文学的眞実を具現しえない場合、それは主観性とかかわるからである。主観性は自意識と連結されることなく、擬自意識ないしは自意識めいたもの、非自意識と連結される。擬自意識や自意識めいたもの、非自意識は、精神が肉体から離脱できない状態を前提とする。これは女性的なものである。ナルシスは女性ではない。文学の機能は、このようにして本来、女性的ではない。女性的なものは、ナルシズムに連ねられない。女性文学という言葉や、女流文学という言葉がある特異性を持つて存在する理由がそこにある。

女流作家になる条件

瀬戸内晴美に「女流作家になる条件」(『国文学 解釈と鑑賞』昭37・9)がある。その十か条は次のとおりである。「女であること」「男性的であること」「美人でありすぎぬこと」「天賦の才能あること」「うぬぼれの強いこと」「嫉妬心の強いこと」「悪妻となる要素を持つていること」「ストリップする度胸のあること」「恒産を持つこと」「孤独に堪える精神の持主であること」がそれである。

この十か条は、極めて興味をそそられるデータを備えている。まず「女であること」と「男性的であること」との、二律背反に注目しよう。女流作家は、もちろん、その性を問題にした場合に、女性であることは当然である。作家の性に、男性を特色づけることは、ほとんど意味をなさないことは、すでに述べた。そして「男性的であること」とは、その性が女性であることを前提にしてのみ成立す

ることに注目しよう。この二つの要因は、根本的なものである。そして、文学の本質が元来男性的なものに連ねられることの基本構造を衝いたものである。

その他は、本質を問題にした場合の、副次的な各論の一部を構成するものである。それらのなかで「悪妻となる要素を持つていること」と「孤独に堪える精神の持主であること」は、案外重要な因子である。悪妻は良妻（賢母）の反対概念である。夫婦が家庭を構成し、子供を養育することは、男女の単位としての家庭のいとなみの機能である。悪妻であることは、すなわち、家庭の束縛を脱し、家庭に拘束されない自由を持つことである。子供の問題はしばらく別としても、夫を夫とも思わぬ自由を謳歌することになる。悪妻は、悪女とは異なる概念である。悪女の対象は「男」ではあっても「夫」ではない。その意味において、悪妻は夫の規矩に従わない女性なのである。

孤独における自我は強靱でなければならない。自持は、すなわち自我の充実を意味する。時にドグマであることもある。「夫」や「男」の庇護のもとにある女性は、決して孤独ではない。本来、女性は女であることにおいて依存性が高い。男との対比において、その弱点を克服した場合に、男性と拮抗することができる。時に孤高であることもある。孤独に堪えうる精神は、もともと男性的なものである。ここでもまた、女性作家における「男性的であること」が、その意味を持つてくる。

*

有吉佐和子の代表作「紀ノ川」の花は、白羽二重の真綿でつくった乳房形を、慈尊院の弥勒堂に奉納する。ここには、「性」としての女がまぎれもなく象嵌されている。たしかに、子供を産むことは、